

# 選手「84%」使用の衝撃

青山学院大学の完全復活で幕を閉じた今年の箱根駅伝。高速化が際立ったが、背後には、トップランナーを魅了した厚底シューズという、黒船来航があった。

今年の箱根駅伝は、優勝の青山学院大学と2位の東海大学がともに大会新記録のタイムを出すなど、「高速化」で新時代の幕開けを印象付けた。学生時代は早稲田大学で山登りのスベシヤリストとして活躍したアロ・ランニングコーチの金哲彦さん(55)によると、今年の高速化の原因は3点あるという。

1点目は気象条件。往路は追い風で気温も上がらず、記録を出すには絶好の条件。通常は向かい風になる復路でもそれがなかった。2点目は学生の意識レベルの飛躍的な向上だ。2015年に青学が10時間49分27秒という史上初の10時間40分台の記録で圧勝しその後4連覇、19年に東海がそこにチャレンジし勝ったことで学生の意識レベル、トレーニングの質が向上したという。

そして3点目がシューズだ。シューズアドバイザーで藤原商会代表の藤原岳久さん(49)によると、今年、実に出場210



ナイキのヴェイパーフライは、今大会で実に8割以上の選手が履いた。クッション性の高さや軽さの両立が実現したという

人中177人、84・3%の選手がナイキの「ヴェイパーフライネクスト%」というシューズを着用した。選手の足を彩ったピンクや黄緑色のシューズだ。昨年のナイキのシェアが95人で41・3%であることを考えると倍増したことになる。

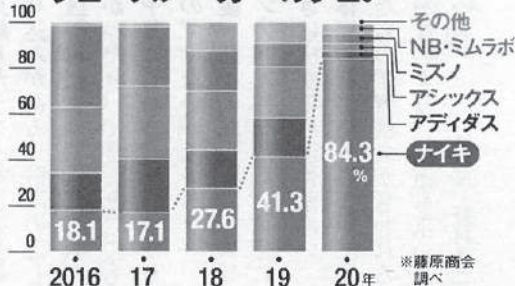
## ナイキ対アディダス

特に注目を浴びたのは、「アディダス・スクール」と言われたアディダスと蜜月関係を保ってきた青学が今回初めて全員がナイキを履き、その上で復活優勝を果たしたという衝撃だ。

5強と言われていた青学、東海、東洋、駒澤、國學院のうち、東海、東洋、駒澤のウエアスポンサーはナイキで、國學院はスボルメダがヴェイパーフライは履ける環境。青学だけがアディダスで、ナイキ対アディダスの構図になっていた。

アディダスで戦ってきた青学は、昨年11月の全日本大学駅伝では最終区で東海に逆転され完

箱根駅伝で選手が使用したシューズメーカーのシェア



敗。このことがナイキ着用を決断させたのではないかとみられている。アディダスは、「アディゼロ エバークリーンパツク」という青学のチームカラーを思わせる緑色を使った、青学へのエールを込めたモデルも作った。しかし、それが箱根路を彩ることはなかった。

## 履く人を選ぶシューズ

選手たちを魅了したナイキのヴェイパーフライとはどのようなシューズなのか。藤原さんは「夢のようなシューズ。水の上を走っているみたいで、足を置いておくだけで前に行く感覚」と語り、こう続ける。

「クッションがすごくあって軽い、カーボンプレートが入っている、跳ねるような推進力、そして厚底なのに薄底のような接地感がある。また、速く

走る以外にも疲労感を抑えるという効果もあります。現状、スピードを維持するシューズでは、これを超えるものはないと言わざるを得ません」

ただ、履けば誰でも速く走れるというものではなく、履きなすにはコツが必要だと言う。

「クッションがあるので軟らかく、決して安定する靴ではありません。スプーン状の硬いカー

ボンプレートの上から足を乗せるように接地することによって推進力が出る仕組みです。フォームがしっかりしていることが前提のシューズです」

ナイキとアディダスは、世界シェアを争う絶対的ライバルだ。なぜこんなに差がついたのか。藤原さんは、こう分析する。

「職人が作ったブランドと、アスリートが作ったブランドの違いが鮮明になってきました」

アディダスの創業者、アドルフ・ダスラーはドイツの靴職人で、一貫して「ものづくり」のブランド。ロボットやAIによる技術革新といった第4次産業革命の理念に共鳴し、近年では「スピードファクトリー」というほぼ全自動の工場に投資していた（その後閉鎖）。

一方、ナイキの創業者、フィリップ・ナイトは自身が陸上選手出身で、オニツカ（現・アシックス）のタイガーのアメリカ販売



権を取得し、米国でタイガーを広めた。

ヴェイバーフライは、ケニアのエリウド・キプチョゲ選手が挑戦した「ブレーキング2」というナイキによるフルマラソン2時間切りのタイムトライアルのために開発された。

### 既製品ならではの良さ

「ナイキはアスリートのために採算に合わないことをやります。エチオピアのハイレ・ゲブレシラシエ選手から5回、アディダスの選手が世界記録を更新してきましたが、人類で初めて2時間切りをしたキプチョゲ選手からナイキになりました」

そう話す藤原さんは、「ナイキが革新的なのは、既製品でやったということ」だと言う。

藤原さんによると、アディダスは選手に合わせてカスタムして作ることに力を入れてきたという。カスタムは一見選手にと

界陸連が調査に動いたとのニュースも報じられたが、前出の金さんは「誰でも購入できるし、どのメーカーもその素材を使ってシューズ開発ができるので、ギリギリ、ルールには抵触しないと思います」と言う。

### 箱根から東京五輪へ

実際、カーボンプレートが搭載されたシューズは、日本のブランドも開発中と言われており、今回の箱根駅伝でも投入されているという。特に印象的だったのは、10区で区間新記録を出した創価大学の選手が着用した白いシューズだ。

「これはミズノが開発中のシューズです。ナイキという黒船来航の逆風の中、ミズノは8区間9人の選手が謎の白いシューズを着用する状況を作り出しました。そのインパクトは大きかったと思います」（藤原さん）

日本の陸上界では金栗四三以

来、道具には頼らず心身を鍛えてレースに臨むという考え方が根強くあり、海外の動向とは異なっており、地面の感触がある薄底の靴が好まれてきた。

しかしヴェイバーフライという。黒船の到来で、選手がカスタムではなく既製品を履くようになった。ナイキでさえ箱根駅伝に新規参入した際には日本市場用の薄底のシューズを作らなければならなかったというが、これによって日本市場に参入したい外資系ブランドは日本規格を作る必要がなくなった。藤原さんが言う。

「世界の潮流が箱根に来ているのがとても興味深い。ついにガラパゴスから脱した印象です」

前出の金さんも、こう語る。「箱根駅伝が世界に通用するマラソンランナーを創るという最初の理念に近づいてきた。ただ速さを求めるだけでは怪我を

するだけですが、それに伴う筋力トレーニングやケア、栄養管理など、いろいろなことを同時にやっている大学が上位にきています。これまでは箱根駅伝が終ると燃え尽きてしまう選手がいることが弊害と言われていましたが、東京五輪がある今年、彼らのモチベーションはキープされています。箱根の成果を五輪につなげてほしいです」



ふじわら・たけひさ / 1971年、神奈川県生まれ。東海大学陸上競技部出身。47歳で2時間34分台の自己ベスト。日本フットウェア技術協会理事。元メーカー直営店長でシューズの販売歴20年以上